

コミュニケーションの成立基盤—若者支援における身体性と場の生成

南出吉祥 (岐阜大学)

kisshou@gifu-u.ac.jp

はじめに

社会のいたるところで喧伝される「コミュニケーション (能力)」。その過剰なまでの圧力の問題性は言うまでもないが、他方でコミュニケーションは個別分断化されがちな社会状況に対抗し、他者とつながっていくための重要な回路としてもある。その両義性を超えていくためには、「コミュニケーション」をどのように捉え、いかなる実践を構築していくべきなのか。そのことについて本報告では、若者支援における若者たちの実情と実践の様子を題材にしながらか、「身体性」と「場の生成」という回路に着目し、考えてみたい。

1. 〈声〉を奪われた若者たち

(1) 意識と身体とのギャップ

；社会規範からの呪縛と動けない身体

* 「学校行かなきゃ」「働かなきゃ」という思いと、「もう無理」と悲鳴を上げる身体

* 社会規範への過剰適応とハードルの肥大化

* 具体的に動き出していくための回路・選択肢のなさ

→ 「学校行かなきゃ」「働かなきゃ」という社会規範からの要請 (※社会から排除されればされるほど、増幅する) と、それが適わない身体性とのギャップにより、自己否定が日々積み重なり余計に動けなくなってしまう苦しさ

(2) 感覚・感情の抑制

；長期のひきこもり状態に置かれていた人びとの感覚・感情表出の弱さ

* 「気が付いたら1日終わってた」

* 「その当時、何をして過ごしていたのか、本当に思い出せない」

* 表情に乏しいひきこもりの若者たち

→ 上記の苦しさや自己否定の積み重なりから、自身の感覚・感情の感度を下げることにより、生き延びるといふ防衛機制

→ 感覚・感情を表現する手段と相手を奪われた状態に長期間置かれてきたこと

(3) 身体性の回復・解放という支援

；社会規範に支配され硬直している身体をほぐし、解放していくという実践展開

* 「社会規範」から外れていられる場の保障 (外部の価値観を持ちこませない場づくり)

* 「ただ走る」「声を出す」「色を塗りたい」など、単純な活動による発散

→ 自己の身体の〈声〉(「疲れた」「お腹すいた」といふ感覚など)を取り戻し、「自分自身から発するニーズ」を見出すことが可能となる

2. コミュニケーション不安／不全

(1) 過剰・過小なコミュニケーションと基本的信頼

*言葉を発しない若者たち

…自分の思いを伝えることができないまま、勝手に動いてしまいミスを繰り返したり、その場に入っていくことができず、立ちすくんだり立ち去ったり

*過剰に饒舌な若者たち

…発言する機会が得られた際には、自分でも收拾がつかなくなってしまうほど喋りたおしてしまい、結局自分の思いは伝えられないまま、周りから浮いてしまう状態に

→自己－他者－社会に対する根源的な不安（基本的信頼の棄損）

(2) 「コミュニケーション」を必要としない場の設定

;上記の困難を抱える若者にとって、「雑談」という場面ほど恐ろしいものはない。そこで必要となるのが、「対話」（≒人と人との言語的やり取り）が前面化しないままに、何か作業をする（≒身体次元でのやり取り）など他者と場を共有できるような仕掛けづくり

→共通の「作業」を積み重ねていくなかで、互いの共通項（コンテンツ）が増えていき、それをネタにしたやり取りが交わせるようになっていく

→それを繰り返していくことで、徐々にその場の「共通項」にとどまらない話題も出していけるようになり、自然なコミュニケーション（雑談）もできるようになっていく

(3) コミュニケーションの前提としての「信頼」（安心）と「未知」（刺激）

;未知への投企であるコミュニケーションが成立するための条件として、「この人に話しても大丈夫だ」「ちゃんと受け止めてくれるはず」という基本的な信頼と、「自己と他者は違う存在である」という差異への了解という二つの次元がある。

*信頼;「この人に話しても大丈夫」「ちゃんと受け止めてくれるはず」という実存的予期

…対話が成立しうると思えなければ、そもそも話しかけようとはしない

*未知;相手がどのように思っているのか分からないという不確実性（他者性の担保）

…相手の気持ちや状態が完全に分かっている状態では、対話を交わす必要がない。相手が自己とは異なる存在だからこそ、コミュニケーションは成立しうる

→とりわけ前者が奪われた状態に置かれた者にとって、後者のみが突きつけられる状態は、自己を脅かす危険な場となり、コミュニケーション場面からの忌避感覚を呼び起こす

3. 回復におけるプロセス

(1) 「他者に受け止められる」という経験；〈受容〉

；どちらかという、個別相談（≒聴き取り）の過程で展開されることが多いが、社会的属性（できる／できないの指標など）ばかりで評価されてきた自分に対し、そのままの自分を受け止め受容されるという存在肯定の次元。

→他者への基本的信頼の獲得

(2) 他者と共に居られる場（居場所）の確保；〈共存〉

；上記受け止めは、そのみだと一方的な依存を生み出し、共依存的支配構造にも転化してしまう。個別的な関係としての受容を、複数の他者とともに居られる場へと拡張していくことにより、「他者とともにある自分」を見出していく次元。

→自己とは異なる存在としての他者との共存

(3) 他者と共に創り出していく場の生成；〈主体化〉

；上記居場所の確保と連動しながら、その場自体の生成・運営に参加していくなかで、主体的な自己を獲得していく次元。その場に内在する価値・文化や具体的な他者からの役割期待への応答が軸になり、コミュニケーションへのニーズも生じてくる。

→他者への主体的な働きかけ

4. コミュニティ生成という課題

(1) 「コミュニケーション」成立の諸要素

①発信；表現手段・方法の獲得

→皮相な「コミュニケーション能力」が強調するのはこの部分であり、実質的には「プレゼンテーション」能力に過ぎない

②受信；他者を受け止める姿勢、理解する能力

→それを可能とするためには、相応の知的能力や時間、精神的余裕が不可欠となる

③メディア；言語を中心とした、意志伝達のためのツール一般

→その多様化と高度化による困惑（「曖昧さ」の消失と過剰）

※消失…関係性や非言語領域まで可視化されてしまう部分

過剰…言語外の「文脈」「権力」などを感知するメディアの不在

④コンテンツ；コミュニケーションする際の内容

→社会的属性や身分が個別化・分断化されることで、「共有」部分が使いづらい状況

⑤環境；コミュニケーションが展開される時間・空間的条件

；「話しやすい雰囲気」などと称される、空間配置や音響など場の設定にかかわる問題

→従来あまり意識されてこなかったため、「対話の場づくり」などにおいて重視される側面

(2) 「文化」を含みこんだ〈場〉（時間・空間・他者）＝コミュニティの保障

*コミュニケーションそののみを取り出し、「個人の能力」とされることのいびつさ

ex. 「コミュニケーション能力育成のための居場所」？

* コミュニケーションする相手との関係をつなぎ、担保する回路

* コミュニケーションをしようとする動機の生成

→ コミュニケーション成立の土台としてのコミュニティ

(3) コミュニティの生成・発展のツールとしての「他者性」

* コミュニケーションの前提としての「他者性」≡異質（可能）性

* 異質性を失ったコミュニティの閉塞・抑圧状況

→ コミュニティの動的プロセスを担保するコミュニケーション

まとめ—コミュニティに宿る力としてのコミュニケーション

「コミュニケーション」は、発信・受信・メディア・コンテンツ・環境などさまざまな要素・契機が絡み合って成立しているものであるが、分節化された把握で失われがちになるのが、そのコミュニケーションが成立している場のありよう、コミュニティの存在である。コミュニケーションとは、冒頭でも述べたように人と人をつないでいくための回路であることは間違いないが、その「人と人」は、どのような場に置かれているのか。その部分を問うことなしに、「関係」のみを取り出しコミュニケーションを問うてしまうことは、結局のところ個人還元主義的な関係論へと水路づけられてしまう。

本報告で見てきたように、コミュニケーションに困難をかかえがちな若者たちの背景には、まずもってコミュニケーションの出発点となるはずの「ニーズ表出」（そしてその土台としての身体性）が奪われていた。そしてまた、自己・他者・社会への基本的信頼（とそれを醸成する場＝コミュニティ）を奪われていた。それらの回復により、社会の中へ自己を位置づけ直すことが可能となり、結果として他者とのコミュニケーションも獲得している。

こんにちにおいて、これほど「コミュニケーション（能力）」が喧伝されている理由としては、それを醸成しうるようなコミュニティが生活上の諸局面から奪われ解体しているからに他ならない。ここで見てきたような場＝コミュニティの生成・回復こそが、個別化されたコミュニケーション把握を越え、他者とつながる回路としてのコミュニケーションを再奪取していくための契機となっていくだろう。それをごく一部の若者への「支援」に留めることなく、社会全体における実践的営為として拡張していくことが必要である。

参考文献

南出吉祥「地域若者サポートステーションにおける支援の実態」

『岐阜大学地域科学部研究報告』32号、2013年

「特集 〈場〉をつくるということ」『社会文化研究』第17号、2015年

中西新太郎『人が人のなかで生きてゆくこと』はるか書房、2015年

平塚眞樹「おとなへの“わたり”の個人化」『生きる意味と生活を問い直す』青木書店、2009年

荻野達史『ひきこもり もう一度、人を好きになる』明石書店、2013年

石川良子『ひきこもりの〈ゴール〉』青弓社、2007年